

あとがき

この論文集は、日朝韓の石造物を素材として、中世日本の文化・技術の形成の有り様とその地域的展開について多面的に追究したものであり、その基礎をなすのは二つの科研費による調査・研究の成果である。その一つは「西日本における中世石造物の成立と地域的展開―石材と形態・様式に着目して―」（二〇一―二〇一三年度科学研究補助基金基盤研究（B）…研究代表者・市村高男）であり、そしてもう一つは、「石造物研究による中世日本文化・技術形成過程の再検討」（二〇一六―二〇二〇年度科学研究補助基金基盤研究（A）…研究代表者・市村高男）である。前者の終了後、成果報告書とは別に論文集の刊行を計画していたが、市村が高知から大阪へ移転したことなど、諸般の事情によって大幅な遅れをだすことになった。したがって、遅れの責めはすべて市村にあるといつてよいが、せつかくの科研費による調査・研究の成果を未刊行のままにするのも残念であるので、次の科研費の成果の中間報告と合わせて一冊にまとめて刊行することになった。

すでに基盤研究（B）の成果は、各メンバーが何らかの形で発表するなど最低限の責めを果たしており、当初は成果報告書に掲載した論考に加筆・修正したものを中心にして、そこに基盤研究（A）の調査や研究会での報告を加えて刊行することになっていた。しかし、「一度書いたものは出したくない」とのメンバーの思いから、新たに関連テーマで書き下ろしたものが多くなり、結果的には原稿の九割が基盤研究（A）の成果によって占められることになった。

これらの原稿を、第I篇東アジア交流と中世日本の石造物（佐藤聖聖、大木公彦・高津孝、海邊博史、全持慧、大石一

久)、第II篇中世石造物の成立と地域的展開(西山昌孝、佐藤利江、今岡稔、西本沙織、原田昭一、本間岳人)、第III篇石造物研究の方法(松田朝由、黒川信義、伊藤裕偉、原田昭一・西山昌孝・永井孝宏、永見秀徳、藤木海)、第IV篇歴史研究と中世石造物(小豆畑毅、市村高男、永井孝宏、北川賢次郎、福島金治)、の四篇に分け、東アジア交流の中で日本中世石造物がどのように成立し、九州から南奥にかけての列島各地にどのような展開を見せたのか、に迫っている。さらに帯磁率・放射線量の測定、実測図作成による諸成果や3D計測図の作成、保存修理の問題、文献史と石造物研究の結合の試みなど、多様かつ新たな研究の方法・視点を提示することに努めた。

また、今回は韓国の釜慶大学の全持慧氏に、韓国の層塔と滋賀県石塔寺三重石塔との比較・検討に関する論考を寄稿していただき、日韓の石造物研究の連携の輪を拡げることができた。博士論文の一部をご寄稿下された全氏にお礼を申し上げたい。

なお、本論は、基盤研究(A)の中間報告も兼ねて約一年前の刊行を予定していたが、いくつかの手違いがあり、仕切り直して計画を進めたこともあつて、この時期の刊行となつた。とはいえ、本書はその遅れた分をカバーできる内容になつてはいるはずである。次年度が最終年度となる基盤研究(A)の最終成果報告は、国際シンポジウムや北海道から沖縄までの研究成果を盛り込み、本書を上回る内容の論文集として刊行する予定である。

なお、最後になつたが、厳しい出版事情の中で刊行をお引き受け下された高志書院の濱久年さんにお礼を申し上げます。

二〇二〇年二月一三日

市村高男